



モクレン

14 編は 神を知らぬ者は心に言う／「神などない」と。人々は腐敗している。忌むべき行いをする。善を行う者はいない(14:1) と歌い始めています。聖書では神などないという人を愚か者と軽蔑し、英語訳では「神を知らぬ者」を Fools(馬鹿者)としています。次に「神などないと言う人」とありますから、現代では「無神論者」となるのではないのでしょうか。何を根拠に「ある／ない」とするかがポイントですがキリスト者は いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである (ヨハネ 1:18) と、

キリストに神を見るのです。旧約の民は創造主にして、アブラハムを選び、その信仰のゆえに子孫を守り導かれる神と理解しています。神は目に見えない不明な、不確実な存在ですが、ないとは証明できない。神を信じる者は神の力を信じて、喜びます。それゆえ、神を知らぬ者は「惜しい、もったいない、損をしている」のではないかと私は思います。詩人も 主は天から人の子らを見渡し、探される／目覚めた人、神を求める者はいないか、と。(14:2) と、神が神を知らぬ者にも愛の眼差しを向けていると歌っています。同時に、神を知らぬ者の特徴を「民を食物にする人」と言っています。詩人はその者に対して 神は従う人々の群れにいます(14:6) と、神は民の苦難を覚え、民と共におられるのだと賛美しています。「讃美歌 21」では 117「神を知らぬ者」をアメリカの改革派讃美歌集から取り入れています。参照 <https://hymnary.org/media/fetch/150330>

15 編は 主よ、どのような人が、あなたの幕屋に宿り／聖なる山に住むことができるのでしょうか(15:1) との問で始まります。幕屋はモーセとアロンの子ら、つまり祭司が祈る場所ですから、答えは祭司のあるべき姿です。完全、正義、真実、誠実に生き、主を畏れる、理想的な人です。面白い点は 金を貸しても利息を取らず／賄賂を受けて無実の人を陥れたりしない人。これらのことを守る人は／どこしえに揺らぐことがないでしょう(15:5) との箇所です。祭司もお金を貸したり、賄賂を受けたりすることがあったのでしょうか。イスラエルでは貧しい同胞に金や食糧を貸しても、利子や利息を取らない伝統がありました。祭司は金銭面で清潔で、欲を持ってはならないのです。詩人は祭司にそれを求めているように見えます。

16 編 1 節に「ミクタム、ダビデの詩」とあります。ミクタムとはおそらく文学上の、または演奏上の用語であろうとのこと。詩人は神を避けどころとし、運命を支える方として信頼し、賛美します。愛する人々にも呼びかけ、他の神の名を唇に上らせないと告白しています。わたしは絶えず主に相対しています。主は右にいまし／わたしは揺らぐことはありません。わたしの心は喜び、魂は躍ります。からだは安心して憩います(16:8) と、主と共におられ、全身全霊が満たされています。あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく／あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず 命の道を教えてください。わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い／右の御手から永遠の喜びをいただきます(16:10) と、死を超えた命を確信し喜んでいきます。このように信頼して生きることはどんなに素晴らしいことでしょうか。詩編 16 を「讃美歌 21」では 328「ハレルヤ、ハレルヤ (たたかいは終わり)」、381 と 382「力に満ちたる」、447「神のみこころは」を関連付けています。447 は 15 世紀のフランス人作曲家のセルミン(C. de Sermisy 1490? -1562)の原曲をバッハがマタイ受難曲に取り入れたものです。参照 https://www.youtube.com/watch?v=56V_QmadeRE

ジュネーブ詩編歌 15 にはカリヨンも加わります。16 は明るく軽やかです。

参照 <https://www.youtube.com/watch?v=M47MQhfbxjI&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=16&t=92s>

参照 <https://www.youtube.com/watch?v=VJoK6VvLf2A&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=16>